様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　２ 年　 ６ 月 １１ 日現在

機関番号：１３１０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2016～2019
課題番号：１６Ｋ０２５６２

研究課題名（和文）コトバの形而上学－ヘルマン・ブロッホ『ウェルギリウスの死』の文化史的研究－

研究課題名（英文）Metaphysik des Wortes - Kulturgeschichtliche Untersuchung des Romans "Der Tod des Vergil" von Hermann Broch

研究代表者
桑原　聡（Kuwahara, Satoshi）

新潟大学・人文社会科学系・教授

研究者番号：１０１６８３４６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,400,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、ヘルマン・ブロッホの小説『ウェルギリウスの死』において主題となっている「コトバの形而上学」を文化史的に明らかにすることを目的とした。
　この作品は、ドイツ・ロマン派の時代に提起された世界の調和の喪失とその再獲得の問いに、言語論として（「言葉」die Spracheと「コトバ」das Wort の使い分けとして）答えようとする、極めて存在論的な小説である。本研究ではこの作品を文化史的観点からできる限り具体に即して分析・解釈し、何故ブロッホが「天球の音楽」のモチーフを多用し，「歌人の責任」を問題とするのかを、また、この作品以後執筆された新たな民主主義確立のための論文との関係を解明した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
ヘルマン・ブロッホの小説『ウェルギリウスの死』は，，ローマ建国を謳った叙事詩『アエネーイス』を執筆した、アウグストアウグストスの時代の大詩人ウェルギリウスの死までの18時間を描いた作品である。西欧ではこの事実から，この大叙事詩を古代ギリシア・ローマの神話との関連で解釈するものが主流であった。それに対して，東洋文化圏の伝統立つ研究代表は，この作品の主題である「コトバ」das Wortと「コトバ」die Spracheの区別を道教，真言宗などの言語観と共通点をもつユダヤ神秘主義の言語観から読み解き，新しい解釈の道を拓いた。この成果はブロッホ研究においても高く評価された。

研究成果の概要（英文）：Ziel dieser Untersuchung war,'die Metaphysik des Wortes' im Roman "Der Tod des Vergil" von Hermann Broch vom kulturgeschichtlichen Standpunkt aus zur Diskussion zu stellen. Der Roman ist ein ontologischer, der die Zerrissenheit der Welt auf die Problematik der Sprache zurueckzufuehren und auf eine moegliche Ueberwindung ihrer Zerrissenheit hinzuweisen. Die Metaphysik des Wortes - obgleich sie eines der zentralen Probleme des Romans darstellt - ist in der Forschung vernachlaessigt worden, da ihr Interesse eher auf den Hintergrund des altgriechischen und roemischen Mythos gerichtet war. Die abgeschlossene Untersuchung bemuehte sich, das Problem der Metaphysik des Wortes kulturhistoisch, und zwar dicht am Text orientiert, zu analysieren un zu interpretieren.
 Die Verantwortung der Schriftsteller, die gewissenhaft und streng mit der Sprache umgehen sollen, ist ein Schluesselwort fuer Hermann Broch. Sie gilt deshlab direkt fuer Brochs politische Schriften nach dem Roman.

研究分野：ヨーロッパ文学

キーワード：コトバ　コトバの形而上学　井筒俊彦　天球の音楽　ピタゴラス　プラトン　ケプラー　ユダヤ神秘主義

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

１．研究開始当初の背景

研究代表者は,「ドイツ・ロマン派期の文学とクンストカマー」(平成 24 年度基盤Ｃ）において,「クンストカマー」というミュージアム成立（フランス革命期）以前のヨーロッパでルネサンス以来数多く作られた「収集室・カビネット」という概念がノヴァーリスの断片に現れることに注目し、その意義を探った。ノヴァーリスはこの断片の中でイギリス風景式庭園にも触れ、「庭園」と「クンストカマー」を「楽園」と表象していることに着目した。ノヴァーリスは「一般草稿」断片 929 において「植物園」「イギリス風景式庭園」「クンストカマー」に触れ，それらが「楽園」を象徴するものであるという注目すべき発言を行っている。ノヴァーリスは作品においては「人工庭園」を「楽園」の象徴として描いているが，断片においてはイギリス風景式庭園を「楽園」を指し示すものとして挙げる。この断片（及び 963）で触れられている「クンストカマー」は，ルネサンスから近代的ミュージアムが成立するまで（およそ 1720 年頃まで: K.ポミアン『コレクション』原著 1987 年）ヨーロッパで大流行した蒐集キャビネットである。従来クンストカマーは（近代科学的）分類の存在しない雑多なコレクションと理解されていたが，1980 年代頃から学問史における知の変容を解明する研究によってそれが蒐集物の無限の組み合わせを観る者に可能にすることによって宇宙を再現し全体知を目指すコレクションであり, その背後にはマクロコスモスとミクロコスモスの照応関係というピュタゴラスに由来する「前近代的」考え方と，G. ブルーノ以後の，宇宙の無限という「近代的」思想が混交していたことが判っている。（H. Bredekamp: “Antikensehnsucht und Maschinenglaube” 1993 等）

このような知見を総合すると先のノヴァーリスの断片の「植物園」「庭園」「クンストカマー」はすべて，失われた「楽園」，失われた宇宙の全体性の再現を巡る思索であることが理解される。

研究代表者は、「ドイツ・ロマン派期の文学とクンストカマー」（平成 24 年度基盤Ｃ）において対象をノヴァーリスからジャン・パウルに拡大した。「廃墟の集積」とも称される J.パウルの作品であるが (Eine neue Geschichte der dt. Literatur, hrsg. von D.E.Wellbery u.a., 2007, S. 592)，彼は執筆にあたって膨大な抜き書きあるいは事項の収集を行い，それを整理・目録化していたことが判っている。また，J.パウルが自らの作品構成に非常に意識的であったことも指摘されている。J.パウルの文学的方法を考える際に問題になるのは，構成に意識的であることが調和・完結した作品を生法を考える際に問題になるのは，構成に意識的であることが調和・完結した作品を生み出さないという点にある。この点は多くの批評家に批判されたところである。しかしながら作品の三分の二を占めるこの逸脱に着目するならば, J.パウルの主眼がむしろこの逸脱にあると考えるべきである。この問題を巡ってはすでに 1961 年に W. Dietrich Rasch が，その著『ジャン・パウルの語り口』Die Erzählweise Jean Pauls (Carl Hanser Verlag)で，この逸脱が調和を失った世界の断片化と呼応していると指摘している。現実の世界を支配している不調和と，「楽園」としての無限なる「自然」が顕現する「第二の世界」の対立は初期作品『見えないロッジ』（1793 年）においても顕著である。「クンストカマー」との関連でいえば,『見えないロッジ』においてそれは先ず「植物標本」herbarium vivum というクンストカマーを構成する重要なコレクションとして現れる。（Carl Hanser Verlag 全集版 Abteilung I, Bd. 1, S. 96; S. 170）しかしこの作品に

おいてそれは否定的なニュアンスをもって描かれる。それは「人間の博物学者」Menschen-Naturforscher によって観察され押し花にされる「植物標本」ならず，人間標本である。クンストカマーは J.パウルにあっては断片化してしまった世界―すなわち統一と調和を失ってしまった世界―の比喩として描かれている。（クンストカマーを想起させる用語としては他に，「貨幣収集室」Münzkabinett；「解剖室」Anatomier-Zimmer などが挙げられる。）

このような廃墟のような現実の中に「高次の世界」eine höhere Welt （S. 173)が現れる瞬間がある。主人公グスタフは夢から目覚めた後，当作品では桃源郷を指すアウェンタールを見下ろす窓辺に寄ると，天は「一筋の無言の光の雨」となって落ちてき，「光り輝く宇宙」の中では「恒星たちの光芒」しか動いていない。グスタフは懐かしい友がいるような言いようのない郷愁に襲われ,「二つの世界が一つに合わさった」と感じる。（S. 176f.）そしてクンストカマーの思想の背景にあるミクロコスモスとマクロコスモスの照応にとって決定的である，調和の象徴を意味する「天球の音楽」Sphärenmusik が鳴り響く。（S. 215）

絶対者を失い,無限に放り出され寄る辺のない近代人の存在を痛切に意識していたJ.パウルが，それでも「楽園」としての「第二の世界」を構想・夢想するとき，近代とは異なった思考，方法が要請される。「廃墟の集積」と称される J.パウル作品は，否定に媒介されたクンストカマーであり,世界という廃墟は,断片間の裂け目から奇跡的に「楽園」からの光を浴びるとき，輝きと調和を取り戻す。そしてこの文学方法は以後 20 世紀の，ヘルマン・ブロッホに代表される小説の指導原理の一つとなる。

２．研究の目的

本研究は，ヘルマン・ブロッホの小説『ウェルギリウスの死』において主題となっている「コトバの形而上学」を文化史的に明らかにすることを目的とする。この作品は，ドイツ・ロマン派の時代に提起された世界の調和の喪失とその再獲得の問いに，言語論として（「言葉」die Sprache と「コトバ」das Wort の使い分けとして）答えようとする，極めて存在論的な小説である。本研究では研究代表者の今までのクンストカマー研究の成果に基づきこの作品を文化史的観点からできる限り具体に即して分析・解釈し，何故ブロッホが「天球の音楽」のモチーフを多用し,「歌人の責任」を問題とするのか，また，他方でこの作品以後，一見すると「コトバ」の主題と関係がないようにも見える新たな民主主義確立のための論文を執筆することになるのかを解明する。

３．研究の方法

本研究は，「クンストカマー」という，啓蒙期以前の制度が，ドイツ・ロマン派の時代の文学者のユートピア構想のモデルおよび文学的方法論となり，それが 20 世紀においてヘルマン・ブロッホの『ウェルギリウスの死』においても用いられていることを論証することを目的とするが，その研究対象の故に，1)今までの研究で収集した資料以外にも，資料収集が必要である。一次資料はいうに及ばず，二次資料も国内には極めて貧弱にしか所蔵されていない。それ故ドイツの図書館で資料収集を行う。2) 資料の文献学的・文化史的研究が不可欠である。ブロッホ作品のみならず，ブロッホが影響を受けたと思われるユダヤ神秘主義思想，とりわけ『ゾーハルの書』等の読み込みが必須である。また，関心を同じくする研究者と研究交流し，その成果を国際学会等で検証する。

４．研究成果

本研究は，ヘルマン・ブロッホの小説『ウェルギリウスの死』において主題となっている「コトバの形而上学」を文化史的に明らかにすることを目的とした。ヘルマン・ブロッホの小説『ウェルギリウスの死』は，ローマ建国を謳った叙事詩『アエネーイス』を執筆した，アウグストアウグストスの時代の大詩人ウェルギリウスの死までの 18 時間を描いた作品であり，ドイツ・ロマン派の時代に提起された世界の調和の喪失とその再獲得の問いに，言語論として（「言葉」die Sprache と「コトバ」das Wort の使い分けとして）答えようとする，極めて存在論的な小説である。

西欧先行研究ではこの作品を古代ギリシア・ローマの神話との関連で解釈するものが主流であった。それに対して，東洋文化圏の伝統立つ研究代表は，この作品の主題である「コトバ」das Wort と「コトバ」die Sprache の区別を道教，真言宗などの言語観と共通点をもつユダヤ神秘主義の言語観から読み解き，新しい解釈の道を拓いた。ブロッホの言う「コトバ」は存在の根源を意味する。ブロッホがユダヤ人として斟酌したユダヤ神秘主義の伝統で言えば「エン・ソーフ」en soph におおよそ当たるものと考えられる。

ユダヤ神秘主義は，プロティノスの「流出」emanatio を徹底して言語的に解釈する。エン・ソーフ自体はいまだ「無」の状態であるが，今にも存在者へと流出しようとしている。流出の過程はユダヤ神秘主義では「コトバ」の自己展開として捉えられる。この点においては空海の真言宗との極めて興味深い平行現象を見て取ることができる。

『ウェルギリウスの死』の最後においてウェルギリウスは「コトバ」das Wort の現出と向き合う。しかし彼はそれを言語で表現することはできない。なぜなら「それは言語 die Sprache の彼方にある」からと述べられ，この長編小説は閉じられる。

ウェルギリウスは「コトバ」の超越性を感じる・聞く。だが，それを人間の言葉では表現できない。ここでは「コトバ」は「純粋な」という形容詞を冠せられ、万有の根拠として、人間の「言語」の彼岸にあるものとして描かれている。人間の言語の彼方にあるものを人間の言語で表現しなければならないというところに長編小説最後の数ページの難解さはある。この問題にブロッホがどのように立ち向かったか、以下に一例だけ挙げたい。

「純粋なコトバ」を前にして「万有は消え失せ、そのコトバのうちに溶け去り消滅し、にもかかわらずそのコトバに内包され保存され、永遠に消え去ると同時に新たに創造される、というのも何ものも失われることなく、終端は発端に連なり円となったから」と表現される。人間の言語を超える（人間の言語では表現できない）「純粋なコトバ」を，ブロッホはドイツ語の非日常的な使い方で暗示しようとする。（ここにブロッホが賛嘆する J.

ジョイスの影響を見ることができよう。）上に訳したドイツ語文は現在分詞 vergehend、過去分詞 aufgelöst、aufgehoben、enthalten、aufbewahrt、vernichtet、neuerschaffen のみで表現されている。理由を表す weil 文章では、過去完了形 weil nichts verlorengegangen war、と過去形 weil das Ende sich zum Anfang fügte が使われ、一見すると、時の経過が表現されているように見える。だが、その意味は「失われていない」「終端が発端に連なり円となる」であるから、状態ないしは永遠の円環運動が表現されていることになり、厳密に言えば、時の経過が示されているとは言えない。ここで表現されているのは、瞬間に生起するできごと、同時に生起するできごと、あるいは永遠に生起するできごとということとなるであろう。言語はその性質上、人間の直感の形式である空間と時間に本質的に制約され、

論理もまたそれをなぞらざるをえないが故に、「無時間」「永遠」を表現することはできない。敢えてそれを行おうとすると、「非」文法的な文にならざるを得ない。ブロッホの文体の特徴であるシンタックスの破壊、単語の羅列、現在分詞、過去分詞の多用は、ブロッホ文学の主題そのものと本質的に関わっているのである。

人間の行為を律する絶対者（ブロッホにあっては「純粋なコトバ」であるが，より一般的に表現すれば「人間を超越する絶対者」となろう）を言語的なものとして理解するところに，ブロッホのユダヤ神秘主義の影響を見ることができると同時に言葉と日々関わる作家という生業に対する厳しい姿勢を窺うことができるであろう。

ブロッホの政治的発言は，大きく分けて二つの問題を中心として展開される。1）なぜナチズムという残虐な非合理的政治形態が生まれたのか（価値崩壊論），2）ナチズムに典型的に出現したような，人間世界の残虐な非合理を律する組織のあり方は可能か。『ウェルギリウスの死』と直接関わるのは 2）の問題である。

『ウェルギリウスの死』において存在の根源を人間を超越する絶対者におき世界の調和が形而上学的に基礎づけられていたように，人間の世界において人道と「人間の尊厳に反する犯罪」－ブロッホが念頭においているのはナチズムである－を抑止するために，人間界における絶対的なものを，個々の国家を超越する「国際連盟」に求める。人権，正義，犯すべからざる人間の尊厳の擁護を骨子とする「国際連盟決議文草稿」Völkerbund-Resolution (Hermann Broch Kommentierte Werkausgabe Bd. 11, S. 195ff., 1937) はブロッホの政治思想を表現する代表的な文章である。

この「草稿」では国際連盟が地上の最高の審級として人間の尊厳と人権と正義を擁護する機関として機能すべきと要請される。『ウェルギリウスの死』とこの「草稿」はパラレルの関係にある。この「草稿」には「絶対的」という形容詞が頻繁に使用されている。(「人間の絶対的尊厳」「絶対的倫理」等々）また、ブロッホが人間の尊厳を民主主義の上位概念としているのもブロッホの思考の特徴である。「たとえそれ（人間の下僕化）が民主主義的な手段で生じようとも」国際連盟はそれを拒絶するとブロッホは記す。（Bd. 11, S.202）ブロッホはこの理念，とりわけ国際司法裁判所の設立が「今日いまだユートピア的夢想」であるとしても，と述べているが（Bd. 11, S.207)，国際司法裁判権と国際司法裁判所は「依然として戦争の原因を一つずつ継続的に除去するために歩み続けられねばならない道」と考えているのである。(Bd.11, S.207)

ナチズムを体験したブロッホがこのような政治思想に至った筋道をわれわれは正しく理解することが重要である。ブロッホは戦後ナチズムに至る「群衆」狂気を理解するために「群衆妄想理論」という題名のもとに一連の文章を記し，一本にまとめようとしていた。その中に「人権と地上における絶対的なもの」（1948 年）という文章がある。この文章はブロッホの政治思想の根源を表現している。ブロッホはこの文章の中で人間の倫理の根拠を「人間が神の似姿であること」に求めている（Bd.12, S.458)。すなわち，ブロッホは人間の「存在根拠」が神に由来すると考えている。国際連盟が依拠すべき倫理は，従って人間のものであると同時に神に由来するものであり，「人権」，「人間の尊厳」の法源は神にあるとブロッホは考える。ブロッホは国際連盟，とりわけ国際司法裁判所の本質を人間利害の調整とは考えず，神に由来する倫理に基づく審判と理解するのである。それ故倫理は「地上における絶対的なもの」と呼ばれることになる。

本研究は，『ウェルギリウスの死』と政治論文の間にある思想的連関を見いだすことをも一つの課題としていたが，その課題は果たされたとものと考えている。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計3件（うち査読付論文　3件／うち国際共著　1件／うちオープンアクセス　1件）

１．著者名 Satoshi Kuwahara	４．巻 未定
２．論文標題 Wortmetaphysik in Hermann Brochs Roman Der Tod des Vergil	５．発行年 2020年
３．雑誌名 Wallstein Verlag	６．最初と最後の頁 印刷中
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

１．著者名 桑原聡	４．巻 35号
２．論文標題 ヘルマン・ブロッホ『ウェルギリウスの死』における天球の音楽のモチーフ について あるいはピュタゴラスとオルペウスについて	５．発行年 2018年
３．雑誌名 あうろ～ら	６．最初と最後の頁 22-38
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 Satoshi Kuwahara	４．巻 11
２．論文標題 Der Begriff der Kunstkammer bei Novalis und Jean Paul	５．発行年 2017年
３．雑誌名 Study of the 19th Century Scholarship	６．最初と最後の頁 5-16
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計4件（うち招待講演　3件／うち国際学会　3件）

１．発表者名 Satoshi Kuwahara
２．発表標題 Die Sprachkritik um 1900
３．学会等名 Humboldt-Kolloquium in Tonji-University（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Satoshi Kuwahara
２．発表標題 Sprachphilosophie eines Aussteigers. Wortmetaphysik in Brochs Roman: Der Tod des Vergil
３．学会等名 Hermann Broch-Tagung（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 Satoshi Kuwahara
２．発表標題 Novalis und Kunstkammer
３．学会等名 Literatur-Strasse-Tagung in Tuebingen（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 桑原聡
２．発表標題 「Hermann Brochの言語哲学――『コトバ』das Wortの形而上学」
３．学会等名 日本アイヒェンドルフ協会研究発表会
４．発表年 2017年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考